

石膏ボード資源リサイクル協会が設立

石膏ボードリサイクル／事例紹介

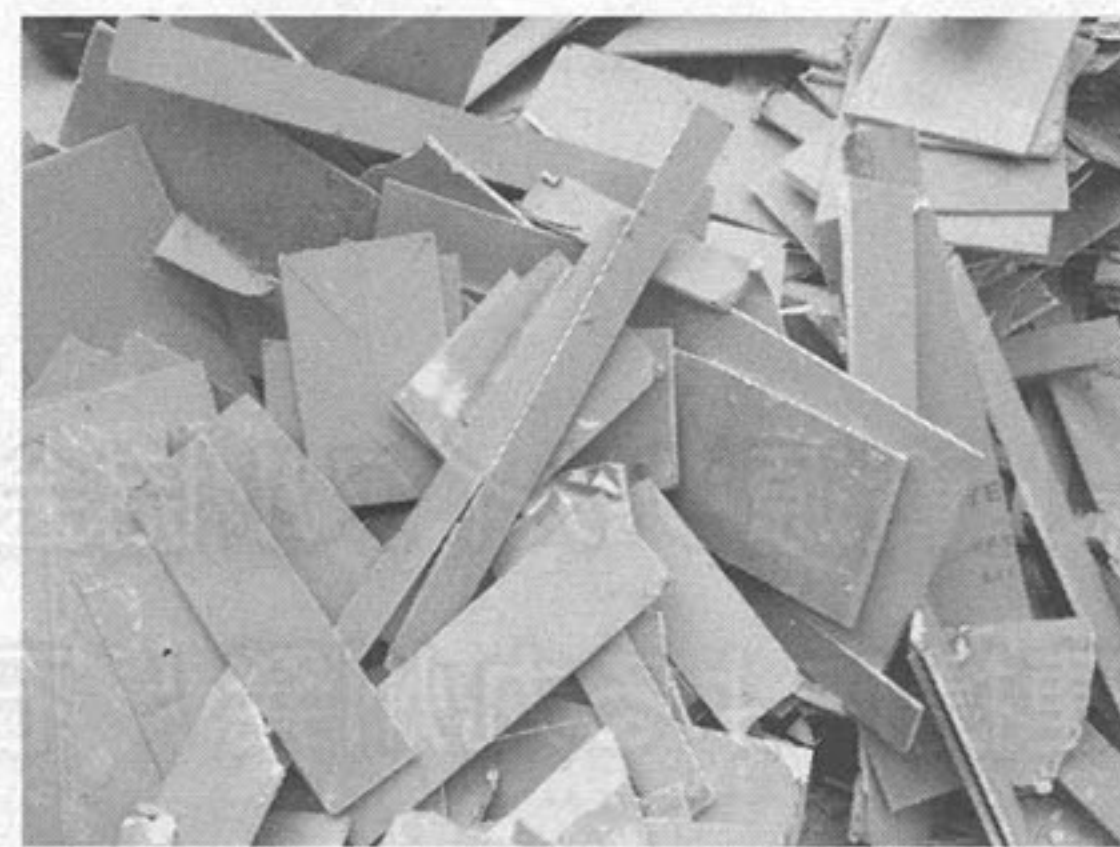
三菱マテリアルと連携で受け皿確保

高度経済成長期に建てられているのが現状だ。設された建物の老朽化が進み、建物の解体工事が受注件数が大幅に伸びてきている。その後、S(北九州市、中山卓源リサイクル協会)と連携し、廃石膏ボードの受け皿が大きな問題となっている。しかし、二社長、096・245・4800、中央環境(長崎市、前正道社長、095・884・3229)の3社が中心となり、石膏ボードの再資源化を推進する「石膏ボード資源リサイクル協会」を設立、廃石膏ボードの受け皿を確保することになり、非常に大きな受け皿を得ることとなり、発生する多くの石膏ボードは、管理型処分場へ処分されている状況に同協会の中山会長は「今回の協会設立で、実績を積み上げることができ、九州地域だけでも特定建設資材のようになければと期待している。今までは、再生石膏粉の受け皿を確保することが課題であり、競争力の強化とリサイクルを基本とする広域処理の構築が可能となる。」

協会の会長には、NRSの中山卓源社長が就任。副会長に大東商事で専務取締役の小原隆二氏、同じく副会長に中央環境で常務取締役の上田恭久氏がそれぞれ就任した。今後、石膏ボードの発生量増加に伴い、破碎施設の増強を予定している。従来施設の処理能力は1日8時間稼働で80ト、新たな施設では、1時間当たりの処理能力を従来の10分から15トに、また、1日8時間稼働だったものが16時間に延長する予定。これにより、現在稼働している施設の3倍の能力で処理が可能となる。同社では、分離した剥離紙は、製紙メーカーの2社に搬入基準をクリアしたものを製紙原料として出荷している。製紙メーカーが受け入れることができな



廃石膏ボード



新築系ボード

立に伴い、破碎施設の増強を予定している。従来施設の処理能力は1日8時間稼働で80ト、新たな施設では、1時間当たりの処理能力を従来の10分から15トに、また、1日8時間稼働だったものが16時間に延長する予定。これにより、現在稼働している施設の3倍の能力で処理が可能となる。同社では、分離した剥離紙は、製紙メーカーの2社に搬入基準をクリアしたものを製紙原料として出荷している。製紙メーカーが受け入れることができな

NRS

施設増強を予定

処理能力が既設の3倍、240t/日に

建設系の混合廃棄物。現在、月平均12万トの処理実績を誇るNRSは、西日本でもトップクラスの処理能力を持つ石膏ボード処理施設を稼働す

る。現在、月平均12万トの石膏ボード製造メーカー(吉野石膏)への解体石膏粉の搬入を開始した。搬入は試験的であるものの、月間100ト近くの解体石膏粉を使用して製品原料として使用開始している。今後、さらなる増産を予定する。

営業展開として、福岡県南部や佐賀県、大分県内でのパートナー企業が決まっているほか、山口県や広島県、鳥取県といった中国地域にも営業拡大する。また、四国エリアにも拡大する計画を立てている。

また、同社では、石膏ボード資源リサイクル協会の設



NRSの施設内の様子

石膏ボード資源リサイクル協会の設